



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第47号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Description	事務局：北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2013-12-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73599
Type	journal
File Information	DRFmonthly_47.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第47号

No. 47 December, 2013

【特集】2013年 DRF10大ニュース

【速報】第11回ベルリン宣言記念オープンアクセス会議 (Berlin11) 参加レポート

【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常

【特集】2013年 DRF10大ニュース

今月号は毎年恒例のDRF10大ニュースをお届けします！今年発行された月刊DRFの特集記事を中心に、オープンアクセスや機関リポジトリの世界で印象深かった10の出来事を時系列順にピックアップしました。

【学位規則改正】

学位規則の一部を改正する省令の施行に伴い、博士論文については、これまでの印刷公表に代え、インターネットを利用して公表することになりました。今回の改正を受け、各大学では学内規則の改正やリポジトリシステムの改修などの対応を行いました。DRFでもwiki上に特設ページを開設、月刊DRFの特集や図書館総合展でのセッション、公開メーリングリストで情報提供や情報交換を行いました。



月刊DRF 関連記事

第37号(2013年2月号)【特集1】学位規則改正

第38号(2013年3月号)【特集1】学位規則改正詳報

第40号(2013年5月号)【特集2】あなたの機関は準備OK? junii2バージョンアップ!

【DRF新体制始動！】

企画ワーキンググループ主査、副査の一新、運営委員の改選が行われ、DRFの新体制が発足しました。これからのDRFの活動を左右するさまざまな課題について、各メンバーの手腕がいかに発揮され、新たな船出を予感させる1年になりました。

月刊DRF 関連記事

第40号(2013年5月号)【特集1】平成25年度体制 企画WG新主査・副査紹介

第41号(2013年6月号)【特集1】DRF 平成25年度体制紹介 第2弾



【日本の研究助成機関OA推奨の動き】

科学技術振興機構(JST)が「オープンアクセスに関するJSTの方針」を発表。JSTの研究費で得られた研究成果について、オープンアクセス化を推進していくことを宣言しました。



月刊DRF 関連記事
第40号(2013年5月号) JSTがオープンアクセスに関する方針を発表



この他、日本学術振興会が科学研究費補助金の研究成果公開促進に「オープンアクセス刊行支援」の応募区分を新設。日本の研究助成機関でもOAを推奨する動きが見られました。

【月刊DRF新連載スタート！】

月刊DRFでは、6月から同志社大学の佐藤翔先生による隔月連載「かたつむりとオープンアクセスの日常」、7月からは首都大学東京の栗山正光先生による隔月連載「今そこにあるオープンアクセス」がスタートしました。毎月、オープンアクセスや機関リポジトリの最新動向や海外事情について、わかりやすく解説されています。なお、今月号は佐藤先生の連載が掲載されています。ぜひご覧ください。



月刊DRF 関連記事

かたつむりとオープンアクセスの日常 佐藤翔(同志社大学)

- 第41号(2013年6月号) 第1回 州レベルでのオープンアクセス
- 第43号(2013年8月号) 第2回 CHORUS VS SHARE 米国パブリックアクセスをめぐる戦い
- 第45号(2013年10月号) 第3回 学術論文のOA化はこれまで言われた以上に進んでいる？
- 第47号(2013年12月号) 第4回 Geekjp AltmetricsとOAI-PMH

今そこにあるオープンアクセス 栗山正光(首都大学東京)

- 第42号(2013年7月号) 第1回 ハゲタカ出版社はゴールドOAの夢を見るか？
- 第44号(2013年9月号) 第2回 トロイの木馬かセイレーンの合唱か？
- 第46号(2013年11月号) 第3回 グリーンだからといって雑誌をキャンセルしてもいいか？

【DRF参加機関150機関突破！】

6月27日に共立女子大学、豊橋技術大学がDRFに参加したことで、DRF参加機関は150を突破しました。日本の機関リポジトリ公開機関数は2013年10月末現在392あり、IR構築機関の約4割がDRFに加入していることになります。

月刊DRF 関連記事

- 第36号(2013年1月号) 【特集2】平成24年度新規参加機関からのメッセージ
- 第41号(2013年6月号) 【特集2】新参加機関紹介
- 第43号(2013年8月号) 新規参加館紹介



【機関リポジトリ推進委員会設置】

平成25年7月、学術情報の円滑な流通および発信力の強化にかかる活動を推進することを目的とした機関リポジトリ推進委員会が設置されました。CSI委託事業を後継する機関リポジトリ推進プログラムについては、同委員会がリードすることになります。

月刊DRF 関連記事

- 第44号(2013年9月号) 【速報1】ポストCSIプログラム始動!



【Altmetrics】

Altmetricsという論文などの様々な研究成果物の影響を、ソーシャルメディアの反応を中心に定量的に測定する手法に注目が集まりました。多くの出版社がAltmetricsの利用を始め、日本では岡山大学がIRに導入しました。DRF10やSPARC Japanセミナーでも話題に挙がり、今後さらなる注目が予想されます。



月刊DRF 関連記事

第40号(2013年5月号)【特集】Altmetrics:「オープンアクセス×ソーシャルメディア」時代の研究評価指数 altmetricsの可能性

【Open Access Week 2013】

10月21日から27日まで開催されたオープンアクセスウィーク、今年のテーマは「Redefining Impact: インパクトを再定義する」です。7回目となった2013年も世界中で400以上のイベントが開催され、オープンアクセスの啓蒙が行われました。日本で開催されたイベントは、DRFwiki の特設ページや月刊DRFで紹介しました。



月刊DRF 関連記事

第46号(2013年11月号)【特集1】オープンアクセスウィーク! みんなの活動

【DRF10開催】

国立情報学研究所のCSI委託事業が平成24年度で終了したことでDRFを取り巻く状況が大きく変化しました。財源確保の手段として寄付を受け入れられるよう要項を改正し、DRF10で開催された総会では財政基盤を含めた今後の在り方や活動内容について、オープンディスカッションが行われました。



月刊DRF 関連記事

第46号増刊号(2013年11月増刊号)【特集1】総力レポート DRF10

【ベルリン宣言から10年】



2003年に「自然科学および人文科学における知識へのオープンアクセスに関するベルリン宣言」が採択され、今年で10年になります。今月号では10周年を記念して開催された「ベルリン宣言記念オープンアクセス会議(Berlin11)」の参加レポートを掲載しています。

月刊DRF 関連記事

第47号(2013年12月号)【速報】第11回ベルリン宣言記念オープンアクセス会議(Berlin11)参加レポート

Berlin Open Access Conference

10th Anniversary of the Berlin Declaration

参加レポート: 三隅健一(北海道大学)

11月19日-20日にベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミーにて開催されたベルリン会議(Berlin11)では、2003年のベルリン宣言からの10年を振り返りつつ、次の10年に向け、さらにオープンアクセス(OA)を推進するためのミッション・ステートメントが新たに採択されました。そこでは、OAリポジトリの推進と共に、現状では年間10%にとどまるOA出版の割合を90%まで高めること、そのためにOA出版をサポートし、学術出版のビジネスモデルの変革を進めることが呼びかけられています。

ベルリン宣言とは？

「自然科学および人文科学における知識へのオープンアクセスに関するベルリン宣言」は、ブダペスト宣言、ベセスダ宣言と並ぶ、2003年に採択されたオープンアクセスに関わる宣言です。宣言では、オープンアクセスを推進し科学と社会に寄与するために、宣言の署名機関が(1)所属研究者/助成受託研究者に成果をオープンアクセスで公表するよう奨励すること、(2)オープンアクセスの研究論文とオンラインジャーナルの品質を保証するための方法を開発することなどを求めています。2013年11月時点の署名機関は、大学や研究助成機関など460(日本は0)にのぼります。

今年のベルリン会議では、政策立案者、研究助成機関、大学などの立場から、学術情報流通をめぐる現状認識と次の10年への具体的な提案が話し合われました。

ドイツ著作権法の改正

初日のセッション1では、ドイツ、フランス、アメリカ(SPARC)、イギリス(公務のため初日ではなく2日目に登壇)、欧州委員会から、政策によるオープンアクセスの推進について述べられました。ドイツからは、著作権法を改正し、著者に2次出版をするための権利を与えるという報告がありました。12ヶ月のエンバゴ期間、公的資金による研究成果という条項を設けていますが、法改正により(おそらく)出版社版のPDFをリポジトリに登録することが可能になります。

また、イギリスからはRCUKの政策がゴールド路線重視であることについて、即時にOAになること、出版社の提供する付加価値に対価を支払うべきこと、などの説明がありました。



リエージュ大学のインセンティブ・マンドート

セッション2では、OAの現況について、様々な立場から報告がありました。リエージュ大学(ベルギー)のバーナード・レンティエ氏からは、リポジトリへの投稿義務化ポリシーを定めた上で、研究者のインセンティブを高めることで、ほぼ100%の投稿があるという報告がありました。報告の中では、研究者と密に接すること、研究者のリポジトリに対する意識を常に高めること、投稿による利益を示すことなどが強調されていました。

ジャーナリストのグリーン・ムーディ氏は、「出版社の課すエンバゴ期間には何の根拠もない。これからはZEN; ゼロ・エンバゴ・ナウだ」と呼びかけ、会場から大きな拍手を受けました。

雑誌購読料のAPC振り替えを提案

セッション2にて、マックス・プランク研究所のウルリッヒ・ポツシェル氏は、従来の査読システムは効率面で限界にきているとして、オープン査読システムを導入した事例(European Geosciences Union)を紹介しました。

また同氏は発表の中で、毎年雑誌購読料の20-30%をOA出版経費(APC)にコンバートし、3-5年の間にOA出版の割合を90%に引き上げよう、という提案もしています。この提案には、質疑応答にて実現しがたいという声が上がっていましたが、セッションステートメントに盛り込まれています。

世界の展望と将来の課題

2日目のセッション3では、ブラジル、ラテンアメリカや中国のOAの現況、非英語・人文社会科学系の電子図書のOA、米国デジタル公共図書館(DPLA)の取組み、ケニアにおける学生へのOA推奨活動が報告されました。

続くセッション4においては、人文社会科学系のOA、教育におけるOAの重要性、若い研究者への支援やオープンデータなどの課題が話されています。

終わりに

ランチを挿んだ午後には、PLOSのキャメロン・ナイロン氏とマックス・プランク協会のロベルト・シュレーゲル氏による対談がありました。「今後のOAを進めるにあたり、全ての研究コミュニティで有効な便利な方法などない」「それぞれの工夫が必要」という言葉が印象的でした。

会議の終わりには、ミッションステートメントが公表されました。会場で配布された草稿(正式版は後日ウェブ公開)では、現在の購読料モデルによる品質水準を保ちつつも、OAモデルのシェアを90%に引き上げていくこと、そのために再利用を含むライセンスの推奨、研究助成資金でOA出版経費を支払えるようにすること、購読料モデルからOAモデルに円滑に移行するために協力してポリシー策定や報奨システムの整備をすること、などが呼びかけられています。また、ベルリン会議は今後、2年に1度の開催となり、次回は2015年に開催されます。

ベルリン会議では、今後10年間でOAをもっと進めて行こう、もっとオープンな世界を作ろうという熱気が感じられました。若い研究者へのアプローチを強めていくこと、各機関のポリシーの整備と研究コミュニティに密に接すること、あるいは再利用のライセンスなど、多くの課題が挙げられています。

ベルリン会議は様々な国、立場の方々、特に政策面での話を聞くことができる貴重な機会となりました。この場を借りて、参加の機会を与えてくださいました機関リポジトリ推進委員会及び国立情報学研究所にお礼申し上げます。

ベルリン会議 (Berlin11) 公式サイト

<http://www.berlin11.org/>

リエージュ大学 レンティエ氏 発表スライド

<http://hdl.handle.net/2268/158972>

Re: Re: ハロー フロム エディンバラ

メールインタビュー: ドミニク・テイト(エディンバラ大学)

DRF9で日本にお呼びし、英国の機関リポジトリの活動をご紹介いただいたドミニク・テイトさんにベルリン会議で再びお会いすることができました。「月刊DRFにコメントがほしい? OKだよ!」とインタビューに快諾いただきました。ありがとうございます。

—ベルリン会議について、感想を教えてください。

ベルリン会議に参加できてとても嬉しいです。世界の仲間たちとともに、10年間でオープンアクセスの成果を祝うことができました。これまでに多くのことが成し遂げられましたが、まだ長い道のりがあり、それまでは「私たちの大学の研究成果は、大部分がオープンアクセスです」と胸を張って言うことができません。最後のセッションでは、楽観主義か悲観主義かという話がありました。私は楽観主義です。オープンアクセスの未来は明るいと思います。

—会議の中で、最も興味を持ったトピックはなんですか。

バーナード・レンティエ氏のプレゼンテーションが特に印象的でした。彼はリエージュ大学(ベルギー)の学長で、機関によるオープンアクセス義務化を遂行し、とても成功しています。成功の鍵は、オープンアクセスにすることと、報奨と昇進のシステム、新しい研究資金獲得とが繋がっていることです。ただし、この方法は一部の機関ではとてもうまくいくと思いますが、どこでも適用できるとは考えられません。このモデルが成功するかどうかは、組織構造や、ポリシーが普及するための組織的な素地が必要だと思います。

—ベルリン宣言のミッションステートメントでは、OAリポジトリの推進とともにOA出版モデルへのサポートが言及されています。また、英国ではRCUKがオープンアクセス料に出資するというポリシーを進めています。現在の英国の状況と、今後の見通しを教えてください。

大切なことですが、RCUKのポリシーはゴールドOA出版とグリーンOAリポジトリの双方をサポートしています。英国の大学はRCUKに助成された研究をオープンアクセスにしようとしていますが、それはどちらの方法も使うことができます。RCUKは、必要であれば論文加工料(APC)を支払うことができる資金を提供していますが、エディンバラ大学は、変わらず組織としてグリーンオープンアクセスを優先させています。

—最後に、日本のみんなにメッセージをお願いします。

日本のリポジトリが元気だということ、日本の研究をオープンアクセスにするために頑張っていることを聞いて、嬉しいです! 私は去年の日本への訪問をとても楽しみました。もし日本からUKに来ることがあって、エディンバラ大学の私のチームを訪ねてくれるのなら……メールをください!

dominic.tate@ed.ac.uk



かたつむりと
オープンアクセスの日常

第4回

Ceek.jp Altmetrics と OAI-PMH

先日のDRF10でも紹介しましたが、Twitter などソーシャルサービスで言及されている日本の学術文献を一覧できるサービス、Ceek.jp Altmetrics^[1] が公開されました。開発を手がけるのは筑波大学大学院の吉田光男さんです。サービス概要の中では自分の名前も挙げていただいているのですが、ときどきコメントを寄せた以外は吉田さんが独力で開発されているサービスです。

DRF10の時点ではCiNii、J-STAGE、JAIRO、JAIRO Cloud 等に収録された文献について、Twitter、Facebook、はてなブックマーク、Wikipedia などでの言及状況を収集し、一定期間内の言及数ランキングや一定数以上の言及があった新着文献等を集計・提供するほか、どのような言及があったかや言及数の推移等を見ることができました。それだけでも十分面白いのですが、野心的に改修が続けられています。2013年11月21日現在、筑波大学のつくばリポジトリや農林水産系のツールAgriKnowledge 収録文献が集計対象に加えられたほか、Yahoo! 知恵袋、CiteULike などでの言及状況がデータ収集対象に加えられ、さらにも当該文献がAltmetric.com 等にデータが入っているものであれば、そのデータも閲覧することができます。

そのほかにDRF10後に加えられた面白い新機能として、「文献カレンダー」があります^[2]。これはカレンダーの上に、その日一番言及数の多かった文献を表示するというものです。11月のカレンダーを見ると、国家秘密関連などの時事的なテーマや、恋愛研究など如何にもソーシャルサービスで話題になりそうなものが並ぶ中で、11月13日には日本調理科学会誌掲載の論文「中世以前の抹茶の粒度と味」^[3]が話題になっていたことがわかります。「まろやかでうま味を感じた。」という言葉で締めくくられた抄録には確かに興味が湧いてきます。DRF10の際にも述べましたが、研究評価ツールとしては使えそうにもないものの、面白そうな論文を見つけてくる上では非常に役立つサービスです。

そんなCeek.jp Altmetrics ですが、現在機関リポジトリ収録文献についてはJAIRO Cloud を使用しているリポジトリと、つくばリポジトリしか直接の対象に含んでいません。これは日本の機関リポジトリ収録文献のメタデータとそのURLを、一元的に取得する方法がないためです。

「いやいや、多くの機関リポジトリはOAI-PMH でデータを提供している」と思われるかもしれませんが、実際にはOAI-PMH でデータを取得するために必要なBaseURL を公開していない機関が多いのです。BaseURL がわかって、そもそもOAI-PMH が正常に動作していない機関リポジトリもあります。

機関リポジトリは論文をアップロードするインフラストラクチャであり、リポジトリそのものが使われることは少なく、なんらかの外部サービスを経由して利用されます。それらに外部サービスに適切にデータを渡し、文献の利用可能性を高めることは機関リポジトリにとって大きな役割…のはずですが、そこが現在、疎かになっています。この点について吉田さんからは「施策面では大学ごとに事情はあっても、システムの機能に大学の事情はあまり関係ないはず。もっと互いに情報を共有したり、ダメな点を指摘しては。また、サーバの重さやリンクの乱れ等、普段使っていれば気づくはずのシステム上の問題を、放置していませんか？ ベンダーに任せるにしても、ベンダーに対策を依頼していますか？」ともコメントいただきました。せっかく作ったものがきちんと機能するようにする、機能しているか常に確認する、という役割についても、リポジトリ担当者は意識する必要があります。

参考リンク

- [1] <http://altmetrics.ceek.jp/>
- [2] <http://altmetrics.ceek.jp/article/date>
- [3] <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008662313>

佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科 助教
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」 管理人

<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>

【次号予告】 1月号「2014年の抱負を詠う（ほか）」



Facebook もやっています！
月刊DRF読者アンケート受付中！

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

http://drf.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html